

令和2年度 豊田工業高等専門学校教員顕彰理由書

機械工学科 教授 清水利弘

清水利弘教授は、昭和62年7月に豊田高専に赴任してきて以来教育、研究および学校運営の各面において次のような業績を残している。

教育面においては、キャリア教育支援活動に尽力してきている。平成23年度にキャリア教育を同校に導入する際のワークグループとして志願して、その中で、就職活動支援の役割を得、多くの内外の教職員、劇団員、マナースクール講師等の助けを得て現在につながる様々なプログラムを立ち上げた。その後、2年間のキャリア教育支援室員を経て延べ6年間の同室長を勤め、豊田高専に進んだキャリア教育があることを全国高専に認められるまでになった。この間、教育関連論文を1報、また、2021年には、ISATE国際会議において論文を承認され、この取り組みを発表する予定である。

また、学校運営面としては、平成14年に初めてのJABEE受審の際の教育改善タスクグループ立ち上げのときに志願をし、西澤一教授、山下清吾教授らとともに設楽郡で行った合宿の際に現在の本校の教育目標を作成した。また、その後の豊田高専の教育改善に関する基本的な事柄を作成するメンバーとして尽力した。この後、「機械工学プログラム」は平成22年度に初のJABEE受審をしているが、受審に際して、JABEE担当員および連絡員を6年間勤めて多くの教職員の助けを得て受審を成功に終えている。

また、平成31年度より、ものづくりセンター長および技術部長として技術長や技術職員に支えられながら、2年間、技術部の運営を統括してきている。

クラブ活動支援においては、平成5年より28年にわたってハンドボール部の担当をしており、平成22年から23年の部長教員の際には豊田市ハンドボール協会の市内の高校教諭と練習試合や打ち合わせを重ね、地区大会を成功させている。ハンドボール部としては、この間全国優勝を8回成し遂げている。

令和元年には、本校が主管校として開催されたロボットコンテストにおいて、主担当の杉浦教授の補佐として、運営に携わった。特に試走場の作成についてはものづくりセンター長として、主要部を大竹技術職員に依頼するとともに、その他の構造部を学生とともに作り上げ、ロボットコンテスト同大会に参加した他高専のチームから高評価を得た。

研究面においては、本校に赴任後、科学研究費は奨励研究を1回、基盤研究Cを2回交付されている。最後に交付を受けた科学研究費は平成29年度から令和元年度であり、その成果の一部は学生と共に学会で発表を行った。また、平成30年度より日本鑄造株式会社と共同研究をしており、そのテーマが卒業研究にも活かされている。

以上の通り、清水利弘教授は、周囲の教職員の支援を受けながら、教育、学校運営、課外活動、地域連携の各方面での活動に顕著な功績があるため顕彰する。

令和2年度 豊田工業高等専門学校教員顕彰理由書

一般学科 准教授 市川 裕理

市川裕理准教授は、平成28年4月に着任して以来、教育、研究面において次のような活動実績を残してきた。

教育活動においては、英語授業においてCLIL（Content and Language Integrated Learning）を取り入れ、ペアやグループワークといったアクティブラーニングの手法を授業活動の基盤とし、学生の活発なアウトプット活動を実践し、英語能力向上に貢献した。専攻科の授業においては、平成30年度、初めてALT（Assistant Language Teacher）を配置し、よりインタラクティブな授業実践の開発を行った。

また、ESD（Education for Sustainable Development：持続可能な発展のための教育）に取り組み、他の英語教員や他教科の教員（地理・体育）、環境都市工学科の教員とコラボ授業を実践し、「教科のつながり」を通して学生の総合的な視野を育成することに尽力した。

授業外においても学生の英語能力向上を目指し、週一回「パワーランチ」と称する英語で話す会を4年間継続している。この取り組みは今年度前期、遠隔授業期間にも実施されており、1年生から5年生までの幅広い学生の参加を促した。この会に参加したメンバーが高専英語プレゼンテーションコンテストに挑戦することも多く、平成29年度からは毎年コンテストの指導に取り組んでいる。平成29年度・30年度には全国大会への出場を果たし、今年度（令和2年度）についても全国大会に出場することが決まった。このように、学生と一緒に楽しみ、彼らの自主性を伸ばすことを目指してきた。

これらの教育活動を生かし、豊田市中学校ではSDGsをテーマにした出前授業を実施し、中学校で教科横断型授業実践について共同研究を行うなど、地域貢献にも努め、令和元年度にはその様子が中日新聞に掲載された。

研究活動においては、主に英語授業に協働学習を取り入れた際の、英語アウトプット能力とジェネリックスキルの向上に関する研究を続けており、着任以降5年間で学会発表は10件、論文発表12件である。また、科研費基盤C分担者として、本校における多読の研究実践も行っている。

学校運営面においては、平成29年度から30年度は学生主事補を務め、令和元年度から現在までは指導教員を務めている。さらに、今年度国際交流センターで立ち上げた国際交流ビデオコンテストの運営を行い、コロナ禍での国際交流の可能性を広げ、他のセンター室員と協力してプロジェクトを成功裏に導いた。

課外活動においては、平成28年度以降インターアクトクラブの顧問を務め、令和元年度からは部長教員の任を果たしてきた。クラブ活動における学外団体との連絡をとり行い、さらにウガンダ・ルーマニアの学校との国際交流を立ち上げるなど、活動の充実を図ってきた。

以上の通り、市川裕理准教授は、教育、研究、学校運営および課外活動といった面で顕著な功績があるので顕彰する。

令和 2 年度 豊田工業高等専門学校教員顕彰理由書

一般学科 准教授 吉澤毅

吉澤毅准教授は、平成 24 年 4 月に着任して以来、下記の活動実績を残してきた。

学校運営においては、平成 24 年度に寮務主事補を務め、創志寮の運営が開始された平成 25 年度に寮監を務めた。寮務主事補の経験を活かし、寮務関係の教員と共に「新寮の運営」及び「寮生数の増加に伴う寮運営全体の見直し」などにも尽力した。その後、平成 26 年度から現在まで指導教員を 7 年連続（電気・電子システム工学科，情報工学科，機械工学科の順に各 2 年間担当。本年度は環境都市工学科を担当）して務めている。

これに加えて、平成 24・28 年度に図書紀要委員，平成 25 年度に国際交流委員，平成 29 年度に教育改善推進室の室員を担当した。また、平成 31 年度から本年度までの 2 年間は、数学科の科目主任を務めている。

教育面においては、着任時から現在までに 13 種類の授業科目を担当した経験により、専攻科を含めた幅広い学年の指導実績がある。学生の目線に合わせた授業づくりなどを理由に、授業改善のためのアンケートにおいて学生から高い評価を得ている。授業後には、担当授業科目以外の質問や編入学試験を目指す学生の質問に関しても、学生が納得できるまで時間をかけて個別指導を行っている。

一方、他の数学科目教員と協力をして 1 年生を対象とした数学勉強室を実施するなど、低学年の指導にも尽力している。数学勉強室は、学力に不安のある学生だけではなく、実力を伸ばしたい学生や入学時に勉強方法が確立できていない学生への補助の役割も担っている。数学勉強室の取り組みは、日本数学会が発行する数学通信（第 24 巻第 1 号）において、豊田高専の教育活動のひとつとして掲載されている。

研究面においては、可換環論（「順序が交換可能な掛け算」と「足し算」を持つ集合における理論）を専門に扱っており、近年は特に加群圏におけるセール部分圏の構造解析に取り組んでいる。研究成果を幾つか挙げると、「拡大部分圏を用いたセール部分圏の構成法を確立」、「メルカーソン達の未解決問題（セール部分圏の安定性とメルカーソン部分圏に関連する問題）を否定的に解決」、「セール部分圏を用いたねじれ理論の拡張」などである。

これまでの研究成果は、海外学術雑誌（単著論文 5 本，共著論文 1 本）及び国内学術雑誌（共著論文 1 本）に掲載されている。これに加えて、単著論文 1 本が海外学術雑誌に掲載が決定している。また、最近の研究成果をまとめた単著論文を海外学術雑誌に投稿中である。令和 2 年度には、研究代表者として科学研究費補助金（基盤研究 C）に「拡大部分圏を用いたセール部分圏の構造解析」の研究題目で採択された。

課外活動においては、着任時から水泳部の副部長教員を担当している。高専大会及び高校生大会の引率をはじめとし、本校が主催校である場合の東海地区高専大会の運営にも他の教員と協力して務めてきた。

以上の通り、吉澤毅准教授は、教育・研究・課外活動及び学校運営における活動に顕著な功績があるので顕彰する。